

2017. 12. 25

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 30

目次

1) 支部大会報告

- ① 5回目の長崎でー第24回支部大会を終えてー (支部大会実行委員長 畠山均)
- ② 「記憶の継承」から「私」の問いなおしへ
(国際基督教大学大学院博士前期課程 山本真知子)
- ③ 「記憶の継承」に関するパネルディスカッション (熊本大学 平野順也)
- ④ パネルディスカッション Research on the Communicative Constitution of Organization in Japan: Opportunities for Application and Critical Engagement の報告
(西南学院大学 宮原哲)

2) 支部活動予定

- ① 支部紀要『九州コミュニケーション研究』第16号の投稿論文募集
(紀要担当運営委員 平野順也)
- ② 第25回支部大会について (副支部長・次回支部大会実行委員長 清水孝子)

3) 会員からのメッセージ

- ① ドイツでの研究生生活 (西南学院大学 鳥越千絵)
- ② 科研費研究の報告～英語教育とコミュニケーション学を架橋する英語スピーチ活動の研究～
(福岡教育大学 吉武正樹)

4) 支部会員の紹介

- ① Debate education and language learning: An introduction of me and my research
(九州大学大学院修士課程 陳瑠琰)
- ② 外国語教育と異文化コミュニケーション (西南学院大学大学院博士後期課程 芳野弥生)

5) 編集後記

1)支部大会報告

①5 回目の長崎でー第 24 回支部大会を終えてー

支部大会実行委員長：畠山 均（長崎純心大学）



開会式での挨拶

第24回九州支部大会は9月23日（土）、長崎市の純心女子高等学校江角記念館で「記憶の継承ーコミュニケーション学の視点から」を大会テーマとして開催されました。研究発表が10件、パネルディスカッション3件と支部大会としてはボリュームたっぷりの内容で、かつ参加者の総数は30名、北は青森、南は沖縄と九州支部大会とはいえ「プチ全国大会」のような雰囲気でもありました。

2年前から九州支部大会では「公害」「戦争」「記憶」をキーワードに議論を深めてきましたが、その流れを受け、今年の長崎大会では被爆体験をどう未来に語り継いでいくか、またこの課題に対してコミュニケーションの研究と教育に携わる者はどのように向き合っていくべきかを考える機会と考えました。そこで大会テーマと同タイトルのパネルディスカッション「記憶の継承ーコミュニケーション学の視点

から」を企画し、支部長の池田理知子先生の司会で、3名のパネリストに登壇頂き、それぞれの体験とそれに基づいた思いを語って頂きました。3名のパネリストは、純心女子高校で長年、公民科の教員としてこの問題を語ってきた新海智広先生、元小学校教員で現在、「平和案内人」という立場で原爆資料館の案内などをされている田代雅美さん、そして次世代の語り部を育てるプロジェクトに参加し被爆体験を未来に語り継いで行こうと積極的に活動している長崎純心大学英語情報学科1年生の松野世菜さんでした。

このパネルディスカッションで特筆すべきと私が思っている事は19歳の大学生である松野さんが意見発表してくれた事です。長崎への原爆投下から72年が経過し、被爆体験を実際に持っている「語り部」の方々が高齢で引退していく中で、悲惨な被爆体験をどのように未来に伝えていくかは長崎だけではなく日本全体の喫緊の課題です。こうした現状を考えると松野さんが発表の中で自分たちが被爆者から直接話が聞ける最後の世代である事、長崎県以外では平和や戦争に関心がない人が多いのでこの活動を通して広く原爆の事を発信していきたいと決意を語ってくれた事の意義は大きいと考えます。



後日、松野さんは「このような学会に参加するのは初めてだったので緊張しましたが、私が現在行なっている活動を『伝える』というコ

ミュニケーションの観点から報告し、大学の先生方や院生の方々と長崎原爆の継承や平和教育について意見交換ができたことはとても貴重な経験になったと感じています。今回特に長崎県外の方々とお話をすることができたのは新鮮でした」と語ってくれました。

長崎での九州支部大会開催は今回で5回目になりました。純心女子高校の全面的協力もあり、大会運営もスムーズに運び、大会テーマを中心にコミュニケーションを巡る様々なテーマについて参加者が議論を深める事ができた大会であったのではないかと感じています。来年、大分でまたお会いしましょう。

1)支部大会報告

② 「記憶の継承」から 「私」の問いなおしへ

山本真知子（国際基督教大学大学院博士前期課程）



2017年9月23日に長崎で開催された、九州支部大会。このはじめて参加した「学会」には、「記憶の継承」における自らの〈位置〉をぐらつかせる言葉との〈出会い〉がありました。印象的だったいくつかの発言を引用しながら、私がどのようにして〈他者〉の「語り」を聞いてきたのかを振り返り、大会のなかでも議論された「継承」とは何なのかということについて考えたことを感想として共有させていただきたいと思います。

まず、池田先生は「語る権利」についてお話されるなかで、『『当事者』の減少に絡めて『当事者性』を論じる場合、『当事者』を頂点としたヒエラルキーを無意識のうちに受け入れてしまっているという矛盾』があることを明らかにされました。この言葉を受けて、私は「沖縄戦体験者」の声を「聞く」ときの自分自身の〈まなざし〉を点検することになりました。私は、2015年から沖縄本島北部に位置する東村高江という集落に通い、そこでの「座り込み」によ

る米軍ヘリパッド建設の阻止行動に参加してきました。その「座り込み」の現場では、「体験者」らが運動の「象徴」的な存在として祭り上げられ、沖縄戦の「記憶」が「座り込み」をする「理由」に回収されることが少なくありません。「体験者」の声を聞きたいと思っていた私も、例外ではありませんでした。池田先生のご指摘は、〈他者〉の痛みを運動の資源として奪用してきたことへの気づきにつながりました。

また、「記憶の継承」における「activity」の重要性についての豊崎先生のお話は、語られる「記憶」を手中に収めることを「継承」のゴールとして無意識のうちに認識していた自らの受け身かつ傲慢な姿勢を突き付けられるものでした。「presentation」ではなく「productivity」としての「継承」の過程で、他者と自己との間の「dialogue」がつくりあげていく「collective」なつながりがあるのではないかという豊崎先生のご指摘は、池田先生のお話にもあった〈当事者性〉をランク付けする「ヒエラルキー」を解体し、痛みを「分有」に連なっていく可能性をはらんでいるのではな

いかと思います。

懇親会では、長崎原爆資料館で「平和案内人」をつとめる田代さんからお話を伺い、「記憶の継承」を〈日常〉に根付かせていく必要性について考えさせられました。田代さんは、小学校の教員時代に「原爆」や「慰安婦」についての紙芝居を読み聞かせたり、戦争に関する「小テスト」を実施したりして、日常的に戦争について生徒たちが考えるように工夫をしてきたと聞きました。そのようにして「平和教育」に力を入れていた学級には、戦争について自発的に学びはじめる生徒たちが何人もいたと言います。田代さんから教えていただいたのは、〈日常〉のなかに〈現場〉を想像／創造していくことが、「自分事」として「継承」していく連鎖を起こしていくことにつながりうるということでした。

大会を終えたいま、〈他者〉の苦痛を〈傍観〉しつづける〈日常〉のなかに、「出来事」の痛みを想像し分かち持ち、「いのち」の側に立って考え行動していく「回路」を開いていきたいと思っています。



「記憶の継承ーコミュニケーション学の視点から」のパネルディスカッション

1) 支部大会報告

③ 「記憶の継承」に関するパネルディスカッション

平野 順也 (熊本大学)

9月23日、純心女子高等学校で開催された第24回九州支部大会に参加しました。第22回九州支部大会に始まった「記憶の継承」をテーマにした支部大会も、これで3回目となります。これまで、九州支部は「学会と社会との接点の構築」を目的に掲げ、福祉、環境問題、戦争に焦点をあて、支部大会を企画、開催してきました。今回は長崎県というあの「記憶」が刻まれた場所での開催でした。今回、私は運営に協力することも研究発表を行うこともありませんでした。それは、大会の最初から最後まで、単純に「学ぶ」ことに注力したかったからです。

2017年8月29日北朝鮮が発射したミサイルが北海道上空を通過しました。その後トランプ米国大統領が「会話(Talking)は解決策ではない。(中略)全ての選択肢がテーブルの上にある」状態だと発表。しかし、事態は改善されることなく、9月3日には北朝鮮が核実験、15日もミサイルが発射されます。9月20日安倍首相は国連総会で、「対話による問題解決の試みは、一再ならず、無に帰した。(中略)必要なのは、対話ではない。圧力なのです」と発言し先述したトランプ大統領の発言を支持しました。このような緊張感の漂う世界情勢のなか、メディアを介して飛び交う世の声に耳を傾けると、我々ですら危機的状況を前に「平和」や「対話」をいとも簡単に放棄し、単純に作り上げられた「悪」の消滅を望むような発言が多く聞こえてくるほどでした。

学会の当日、私の頭は色々な糸が絡み合った状態でした。「他者」、「対話」とは本来何を示

すものなのか、安易に使用されてきただけなのか、単なる理想を盲信してきたのか、「平和教育」では何を伝えようとしてきたのか、といった疑問を考えながら過ごしていたのです。

特に「異文化理解」や「平和教育」についてのパネルディスカッションは、私の混乱を鎮静するほどの内容でした。さまざまな取り組みが行われている新海先生、豊崎先生、そして横溝先生を始め、「平和案内人」の田代さん、次世代の語り部の松野さんに、それぞれの立場から「平和」の重要性だけではなく、脆さについて教えていただきました。これまでの「平和教育」とは被害者の視点から構成された偏ったものだったのかもしれない。被害者に与えられた惨禍、加害者がもたらした災厄、伝承者の経験、継承者の責任が向かい合い、衝突し、議論し、そして関連づいたその先に、私たちが語るべき「平和教育」が見つかるのではないかと思います。

国連で首相はこれまで「対話」を行ってきたのだと語調を強め訴えました。しかし、それは「対話」ではなく単なる「会話(talking)」でしかなかったのではないのでしょうか。「会話」することが不可能に思えるような他者で行う言語活動こそが、本来の「対話」なのではないのでしょうか。換言すれば、「会話による問題解決の試みが無に帰した」と感じた時こそ、「対話」が必要となるのではないのでしょうか。第24回九州支部大会の後、私はこれまで「対話」の煩わしさ、重大性、そして可能性を軽視していたのだと猛省しました。そして、今まで以上に「対話」の重要性を訴えることが必要なのだ

と覚ることになりました。次年度も「記憶の継承」をテーマに支部大会が大分県で開催されますが、既に楽しみであります。(勿論、それ

までに各国政府の暴走が落ち着けばの話ですが。)



「被爆体験継承における異文化理解」のパネルディスカッション

1)支部大会報告

④パネルディスカッション **Research on the Communicative Constitution of Organization in Japan: Opportunities for Application and Critical Engagement** の報告

宮原 哲 (西南学院大学)

日本コミュニケーション学会では設立以来「コミュニケーションとは」という分かりやすそうに分かりにくい、まだ正確に理解されていない課題にさまざまな角度から取り組んできた。特にこの10年近く年次大会のテーマを「コミュニケーション(学)と〇〇」と設定し、他の領域との関係や違いを明確にすることによってコミュニケーション学のアイデンティ

ティの確立に努めてきた。

そのような中、このパネルディスカッションに参加して、コミュニケーションの奥深さを再確認できたように思える。このセッションは Université de Montreal, Department de Communication 准教授で、協定関係にある西南学院大学に客員教授として滞在中の Boris Brummans 氏をお迎えし、西南学院大学の清

宮徹氏が司会兼、パネリストとして企画された。

コミュニケーション=道具、スキルという側面は見えやすく、理解されやすい一方、その逆転の発想、つまり、たとえば組織とコミュニケーションの関係を例にとれば、人間はコミュニケーション（シンボル活動）をするからこそ組織を作り、維持、発展させるという考え方はまだ受け入れられているとはいえない。このことは家族、会社や学校、病院などの組織、国と国、また日常の交友関係、親子の関わり、医者と患者の関係など、人間社会すべての状況で認められる、言わばコミュニケーションの存在論の要として一貫した主張である。

このような背景の下で今回の Brummans、清宮両氏によるパネルディスカッションでは、組織は常にメッセージ（ディスコース）を、その内外に向けて発しているという考えから発生した、比較的新しい組織コミュニケーション学 一端である “communicative constitution of organization (CCO)” の概念と、これまでの研究の経緯が明確にされた。さらに、コミュニケーション学の研究者による critical engagement の可能性を探るといった意欲的な議論にも目を見張るものがあった。どのような学問領域も、研究結果を何らかの方法で人間社会に還元することができなければその存在意義が疑われ、そのうち衰退してしまう。研究の

ための研究ではなく、結果を問題解決や質（例：組織を構成するメンバーの満足度）の向上に役立つ方法で応用できなければ学問としての存在意義は保障されない。

これらの観点から見ると、このパネルの意義は大きかったと言える。組織が発するディスコースには、いくつかの機能、目的があると Brummans、清宮両氏は述べた。一人ひとりのメンバーのアイデンティティの確立と維持のための 1) membership negotiation、組織そのものの構成、構造をメタレベルで確認、強化する 2) reflexive self-structuring、組織の活動をまとめ、総括する 3) activity coordination、それに組織の社会での存在を明確にする 4) institutional positioning であることが分かりやすく解説された。

抽象的かも知れないが、「人はコミュニケーションするから人間」であり、その逆ではないということ改めて感じさせてくれたパネルだった。日本ではコミュニケーション学の歴史は約 50 年と言われるが、現在でも社会学や心理学などの近隣領域と比べてみて認知度はまだ低い。私たちコミュニケーション研究者・教育者は常に社会での出来事に目を向け、「問題」を発見し、人間の社会活動での問題を少しでも解決し、質を向上するために研究を行っているという考え方をもち続ける必要があるだろう。



パネルだけでなく、研究発表も充実。



懇親会も盛況でした。

2)支部活動予定

①支部紀要『九州コミュニケーション研究』 第16号の投稿論文募集

紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

今年度は『九州コミュニケーション研究 15号』を予定通り10月1日に無事刊行することが出来ました。紀要委員の先生方、査読を担当していただいた先生方をはじめ、貴重な論文を投稿していただいた志岐先生にこの場を借りてお礼申し上げます。また、特別企画として昨年度開催した支部大会の高谷先生による基調講演および畠山先生と池田先生に行って頂いたシンポジウムでの報告も掲載しております。『九州コミュニケーション研究』は、日本コミュニケーション学会九州支部 HP からダウンロードできますので、ぜひご一読ください。

さて、前号を刊行してからほぼ休む暇もなく『九州コミュニケーション研究 第16号』の準備が始まっております。今回も例年通り1月末日、2018年1月31日（水）が投稿論文の締め切りとなります。1月といえば入試業務などで忙殺される時期ではありますが、奮って

投稿していただければ幸いです。また、14号、15号と支部大会に関連した特別企画を掲載してきましたが、勿論16号も同様に特別企画を掲載します。まだどのような形で纏めるか決定しておりませんが、長崎県で開催された第24回九州支部大会は私にとって非常に啓発的な機会でありましたので、支部大会の濃い内容を薄めることのないような特別企画にしたいと思っています。また、「学会と社会との接点を構築する」という目標で開催している支部大会の取り組みを、当日参加できなかった方々に届けるためにも、充実した内容のものを準備したいと考えております。この企画に関してこれから多くの先生方に編集などの作業をお願いすることになりますが、九州支部の更なる発展のためと考えていただき、ご協力のほどどうぞよろしく願いいたします。

2)支部活動予定

②第25回支部大会について

副支部長・次回支部大会実行委員長：清水 孝子（日本文理大学）

大分では、第3回（1996年）、第9回（2002年）、第12回（2005年）、第21回（2014年）と支部大会を開催してきました。第25回の記

念すべき大会を再び大分で開催できることを嬉しく思います。

特に、過去3回の九州支部大会は、「公害」

「戦争」「記憶」をキーワードに、連続して議論を深めてきました。大分には、占領期に検閲された「プランゲ文庫」収蔵の大分県で発行された雑誌・新聞などを調査、研究し、地域の先人達の思いを伝え続ける「大分プランゲ文庫の会」の活動があります。その会の活動との共同で、「記憶の継承」をテーマに、午後の講演やそれに続くパネルディスカッションを企画し、会場のみなさんとの議論の場を設けていきたいと考えています。

日程：2018年9月22日（土曜日）

場所：ホルトホール大分（408・409 会議室）

〒870-0893 大分県大分市金池南 1-5-1

大分駅前：上野の森口よりすぐ

詳細については、現在検討中です。次号のニューズレターでご報告できると思います。日程、場所のみ決定していますので、お知らせいたします。会場は第21回支部大会で使用した場所です。みなさま、是非、ふるってご参加ください。



3) 会員からのメッセージ

① ドイツでの研究生生活

（西南学院大学 鳥越千絵）

1年間のサバティカルのために、2017年4月からドイツ南部にあるバンベルク (Bamberg) という町に滞在しています。バンベルクは人口7万人ほどの小さな町ではありますが、中世の街並みがそのまま残る旧市街は世界遺産に登録されており、ドイツ国内では人気の観光地の一つなのだそうです。

10年前の夏に一度観光で訪れただけだったこの小さな町とはどうやら縁があったようで、客員研究員としての滞在を打診した南ドイツのいくつかの大学のなかで、唯一受け入れを許可してくれたのがバンベルク大学付属の研究

機関である Europäisches Forum für Migrationsstudien (efms) でした。efms はヨーロッパ圏内の移民・難民問題や多文化共生についての調査や研究を行う機関で、バンベルク大学社会学部のヘックマン教授を筆頭に、専任の研究者やフリーランスの研究員、インターンの学生たちが他の研究所や大学と合同で調査・研究に取り組んでいます。

私の主な研究テーマは移民に関するディスコースと人種主義で、これまでは米国と日本における移民や外国人労働者に関するディスコースと、そこで構築される人種主義について

の研究を行ってきました。近年の移民・難民問題を巡って様々なディスコースがせめぎ合っているドイツには以前から興味がありましたので、今回 efms に受け入れてもらえたことは幸運でした。現在は、中東やアフリカからの移民・難民ばかりに焦点を当てたドイツの移民ディスコースの陰で、「見えない」存在になっているアジア人移民のアイデンティティーやディスコースについて調査を進めているところです。

efms という良い受け入れ先に恵まれたこともあり、ドイツでの研究生活は順調だったのですが、肝心の日常生活に慣れるのには思いがけず苦勞をしました。ドイツでは英語が通じるだろうと高を括っていたのがそもそもの間違いで、バンベルクのような小さな町では英語だけでは生活できないことに渡航後すぐに気が付きました。対面式が一般的なパン屋や肉屋では買い物をするのも一苦勞ですし、役場での手続きでは緊張と不安で汗だくになりました。サバティカル開始から2か月ほどはドイツ語を耳にするのさえも苦痛でしたし、習慣の違いにもイライラし、外出するのが怖いと思うことさえあったほどです。大学、大学院とアメリカ留学を経験し、異文化コミュニケーションを教える身でありながら、まるでお手本のようなカルチャーショックに直面している自分が情けな

くなると同時に、「今まさに私はカルチャーショックを経験している！」と客観的に自分の行動を観察することが面白くもありました。カルチャーショックの最中は決して楽ではありませんでしたが、授業のネタができたという意味でも、サバティカルの滞在先として米国以外の国を選んだのは良い選択だったと思っています。



レグニッツ川に架かる橋の上の
バンベルク旧市庁舎

3) 会員からのメッセージ

② 科研費研究の報告

～英語教育とコミュニケーション学を架橋する 英語スピーチ活動の研究～

(福岡教育大学 吉武正樹)

「コミュニケーション」が英語教育のキーワードになって以来、どのくらいの時間がすでに経過したでしょうか。その割には、コミュニケーションを本質的に捉えた研究や実践は驚くほど少ないと感じます。残念ながらこの事態は、私たちコミュニケーション研究者が英語教育の分野において、いかに学問的貢献をしてこなかったかを表しています。

平成 28 年度から 3 年計画で始まった私たちの科研の研究題目は、「シティズンシップ教育を基盤とした英語教育再編のための『対話的』英語スピーチ活動」です。私は本研究を、英語教育とコミュニケーション学を架橋するプロジェクトと位置づけています。共同研究者は広島工業大学の三熊祥文さん、久留米工業高等専門学校の横溝彰彦さん。英語教育、英語スピーチ、コミュニケーション学でつながった名チームだと、内心自負しています。

英語スピーチを「対話的」に

外国語教育、特に英語教育では、言語はコミュニケーションの「道具」であり、コミュニケーションの相手とは私たちの日常からはみ出る（例えば同じ国民国家に属さない）「文化的他者」だとみなされています。しかし、グローバル化が加速する今日、こうした想定自体が揺らいでおり、多様な価値観を持つ「市民」の共存がこれまで以上に求められています。本研究では、「日本人と外国人」といった「異質性」をあらかじめ固定せず、民主的なコミュニ

ケーションによって包摂的（inclusive）な社会を創出する「市民」を育成する英語教育の在り方とその指導法を模索しています。

そこで着目しているのが英語スピーチ活動です。「英語スピーチ」で思い浮かぶのは、日本語での原稿書き、英語への翻訳、暗記と練習、本番の苦痛や緊張と終えた後の解放感、そんな情景と作業ではないでしょうか。確かに英語を人前で使う分「コミュニケーション」っぽいし、見栄えもします。しかし、そこに語りかける相手や傾聴すべき相手、互いへの働きかけがなければ、それは「独り言」にすぎません。

そこで本研究は、市民に必要なコミュニケーション能力を涵養する英語教育の指導法として、モノローグに終始しがちな英語スピーチ活動を「対話的」にするための理論的枠組みと実践法の構築を試みています。「対話」ですので、話し手と聴き手は双方向の矢印で結ばれていなければなりません。話し手は聴衆のことを不安に陥れる「恐怖の源泉」ではなく、意見を共有し高め合う「同志」と見なす必要があります。そのためには、話し手に相手意識を持たせる工夫が不可欠です。

鍵としての聴衆教育

スピーチというと話し手に注目しがちですが、「対話的」英語スピーチ活動の鍵の一つが「聴き手」の役割です。日本では、話し手が恥ずかしさを笑いでごまかし、聴衆と一緒に笑うことでそれを受容するという、話し手—聴衆間

の「共犯関係」が成立しがちです。また、聴衆が積極的に話し手の言葉の欠如を補完する「遠慮一察し」機能が起動することで、「他者と向き合った言葉によるコミュニケーション」を阻害する傾向があります（だからこそ、母語ではなく「外国語」教育にこだわっているわけです）。

上記のような連関にくさびを入れるためには、聴衆の意識にこそ「てこ入れ」しなければいけません。例えば、話し手の話に **Aha**.や **Really?**とリアクションさせたり、話の後に **high five** (ハイタッチ) させたりしてみてください。単純なことです、それだけで恐怖の源泉だった他者との間にコミュニケーション回路が開き始めるものです。例えばさらに、小グループで話し手に **topic sentence** だけを言わせ、後は聴衆からの質問に答える「記者会見方式」を取り入れると、聴き手が話さなければ進

みませんし、話し手は質問に答えようと聴衆に「語り」だします。このように「反応する聴衆」・「話す聴衆」を意識させることで、次に自らが話し手になる際、すでに「協同者としての聴衆」を先取りすることができるのです。聴衆教育こそ話し手教育への近道だ、と私たちは考えています。

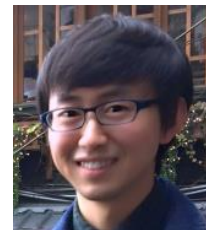
研究は現在折り返し地点。各々の勤務校で「対話的」な英語スピーチ活動に工夫を凝らしつつ、理論的枠組みの構築も推し進めているところです。こうした試みにより、英語教育とコミュニケーション学が架橋され、英語教育は「コミュニケーション教育」へと進化することでしょう。多くの学会員の方々にこの理論的・実践的探究に参加していただければ心強いです。Come and join us!

4)支部会員の紹介

①Debate education and language learning:

An introduction of me and my research

ちん しんえん
陳 璿琰 (九州大学大学院修士課程)



It is my great pleasure and honor to introduce myself and my current research here as a new member of Japan Communication Association, Kyushu Chapter.

My name is CHEN Jinyan, a current second-year Master's student from the Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University. I received my Bachelor's degree in translation and interpretation studies in China where I developed a strong interest in learning different languages and the culture behind each language. Therefore, after graduation from Xi'an International Studies University in 2014, I decided to come to Japan to pursue further study of language and communication. After spending one year and a half learning Japanese at a language school, I am now a Master's student majoring in language and communication studies.

I was a member of debate society when I was in college. Through my four-year experience of debating,

I strongly felt changes in terms of the ability of critical thinking and self-confidence that debate has brought to me. Therefore, in conjunction with my academic interest in language and education, I decided to further look into language- and education-related issues in the context of English academic debate. Through my reading of literatures in second language acquisition, what caught my attention was the studies of communication strategies of non-native speakers of a language over the past four decades since strategies are the blueprint which helps one achieves a goal more efficiently. On the other hand, although there has been a large amount of research on strategies in academic debate, most are concerned with methods of constructing arguments at the level of logic whereas language is seen as the channel of delivery and little has been known regarding language-related strategies in academic debate, which may be because of the focus on the content of arguments in competitive academic debate. However, with academic debate in foreign languages being introduced to education as an approach of learning foreign languages and other subjects, it is necessary to fill the gap and investigate debaters' linguistic behavior and strategies with the aim of further enhancing academic debate's effect on education. Starting from this point, I am now focusing on Japanese English learners' language-related strategies in academic debate tournaments via both qualitative and quantitative approaches. To guarantee the quality of data, I participated in two national debate tournaments and one international debate tournament which are held in Japan to conduct a questionnaire survey and recorded a final round as the source of transcription. It was not easy, but I enjoyed it since I can see myself making progress bit by bit and helping people who share the same interest with me. After over a year of preparation, I am now focusing on completing my thesis and would like present what I have found.

For my future research, there are mainly two issues that I would like to focus on: a comparative analysis of the language-related strategies of Japanese and Chinese debaters in academic debate, and the identity constructed in academic debate.

Since it is believed that one's first language knowledge and pragmatic knowledge transfer to the second and even the third language, I would like to broaden the scope of my research and conduct a comparative study between debaters from Japan and China to see if there are different types of transfer in their debate speeches. For example, in my current study, it was found that Japanese speakers tend to lengthen or add vowels to the end of English words the same as they would do when speaking Japanese. To come up with a fruitful conclusion that benefits more debaters, it would be meaningful to conduct this comparative research.

In addition to the comparative study of strategies, I would also like to investigate identity that is constructed in academic debate. In the past, academic debate is often seen as a role-playing game where

debaters are assigned to certain roles and speak for the roles instead of themselves. However, it has been gradually recognized that debate is a method of empowerment and debaters should make their true selves heard in a world where diversity is valued. In this sense, the identity that they construct in debate will surely witness a change. Through interview and discourse analysis, it is hoped that this research will be able to reveal how identity changes in academic debate.

Above is a brief introduction of myself and my research. I would greatly appreciate every future opportunity to learn from other members of this big family. Thank you very much.

4)支部会員の紹介

②外国語教育と異文化コミュニケーション

芳野 弥生（西南学院大学大学院博士後期課程）

私が大学卒業から 30 年あまりを経て大学院に入ったのは、まとまった時間が取れるようになり、異文化での生活に関心を持つようになっていたコミュニケーション学を専門的に学びたいという思いが強くなっていったからでした。

1980 年代後半に夫の仕事の関係で、アメリカニューヨーク州に 2 年間滞在する機会がありました。当時海外にいて日本の情報を得ることは今のように簡単ではありませんでした。もちろんインターネットは普及していませんでしたし、地方都市では日本の本や雑誌も注文しなければ手に入らない時代でした。そのような中で生活していると、それまで意識していなかった日本の文化や習慣に気づかされるのがたくさんありました。例えば、銀行や会社などで何か不手際があった場合、日本ではその人本人の責任でなくても組織の一人として謝罪することが一般的ですが、アメリカで本人以外の人を代わりに謝るようなことは決してありませんでした。なんとなくもやもやとした気持ち

のまま引き下がることになっていたことを思い出します。

異文化に身を置いて文化の違いを体験することは本当に興味深いことでした。夫が研究をしていた大学には様々な国から研究者が集まっていました。その研究室の教授から日本語を教えてほしいと頼まれていたこともあり、私もよく研究室に出入りしていました。ある日のこと文化についての話題になり、教授が「研究者には自分の国の祝日だからということで休む人がある。中には何も言わないで休む人もいるんだ」と少し困った様子で話をされました。異文化間では自分の「当たり前」は必ずしも通用しないことをお互いが理解することが大切なのだなと実感したものです。

近年グローバル化はますます加速しており、異文化間の交流の機会もひと昔前とは比べものにならないくらい増加しています。異文化コミュニケーションについての専門的な知識は今後ますます必要になっていくと思われます。

私は、外国語教育のコンテキストにおける言語とコミュニケーションの関係について研究を行っています。言語は異文化間でコミュニケーションするためには欠かせない要素であり、言語能力と異文化適応の関係についての研究は多くなされてきました。多くの研究が、異文化に適応するためには高い言語能力を身につけることが有利であることを示しています。また、逆にその文化に適応することで、その文化の言語を習得しやすくなるという研究もなされています。しかしながら、ある程度言語能力を身につけても異文化でのコミュニケー

ションがうまくいかないという研究結果も見られ、言語とコミュニケーションの関係についてのさらなる研究の必要性が示されています。

言語と文化は密接に関わり合っているため、文化はその言語とコミュニケーションの仕方に影響を与え、また言語もその文化とコミュニケーションの仕方に影響を与えています。今後も研究を進めていき少しでも教育の分野に貢献することができるように努めていきたいと思えます。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

5)編集後記 横溝 彰彦 (久留米工業高等専門学校)

記念すべき第30号のニューズレターを無事に発行することができました。今号の大きな目的は、支部大会にご参加いただけなかった皆様に、支部大会の様子をお伝えすることです。原稿依頼を快く引き受けてくださった皆様に改めてお礼を申し上げます。

「30号というキリ番を祝し、何か特別企画を考えた方がよいのだろうか？」と検討しましたが、「普段通り」を貫くことにしまし

た。無理せずに、緩く、そして長く続けていくことが支部活動の1つの側面だろうと勝手に考えています。肩肘を張る必要のない、このアットホームさが九州支部最大のウリではないでしょうか。

何気ない普段通りの生活を送ることができていることに感謝しつつ、年末年始には家族サービスに励みたいと思えます。

皆様、良いお年をお迎えください。

発行元：

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

立命館アジア太平洋大学 教育開発学修支援センター 筒井久美子

電話：0977-78-1111 メール：kyushu@caj1971.com

URL： <http://www.caj1971.com/~kyushu/>
